

三河国賀茂神社竹尾家文書 I

—— 草鹿砥宣隆に関わる史料を中心に ——

荒 木 亮 子

1. はじめに

愛知大学総合郷土研究所では、三河国八名郡賀茂村（豊橋市）の賀茂神社神主竹尾家文書を新たに所蔵史料に加えることができた（令和元年に古書店から購入）。

竹尾家については『賀茂縣主竹尾家と其一族』⁽¹⁾に詳しく、家系図や碑文が紹介されている。ただ、惜しむらくは、その他の史料翻刻がなされていないことである。

同書の刊行以後も田崎哲郎氏などの仕事⁽²⁾により若干の史料翻刻が行なわれているが、すべてを数えても10点に満たず、まだまだ十分とは言いがたい。

そのような状況の中で、今回愛知大学が竹尾家文書を収蔵することができたことは、勿怪の幸いと言えよう。そこで早速、同文書の史料紹介を行なう。今回は、三河国一宮砥鹿神社神主で国学者の草鹿砥宣隆に関わる史料を取り上げる。

2. 解題

史料① 草鹿砥宣隆から、門人の竹尾準⁽³⁾と林芳太郎（のちの戸塚環海）⁽⁴⁾に宛てた書状である。署名の「崧」とは宣隆のことだ。

書かれたのは明治2年（1869）正月、宣隆が皇学所の御用掛・講官として京にのぼって一ヶ月経った頃である。約束していた書籍を

書林に集めさせたが、残り（収集漏れ）は時間ができたら自分が買い集めて送ると記している。また、「益御勉勵奉祈候、御詩作拝見致し度」と師として、遠く離れた京から二人を気にかけている。

準・芳太郎がともに宣隆の門人であることはこれまで知られてきたが、師弟のやりとりの実相は従来示されていないことから貴重な一通である。

なお、追而書から皇学所の同僚で、京の賀茂神社社家の岡本経春⁽⁵⁾と懇意になった様子が窺われる。賀茂別雷神社で行なわれる御阿礼祭と三河の賀茂神社の大祭（御生祭）^{みあれ}の異同について話が弾んだようだ。

また岡本家は賀茂県主の末裔であり、三河の竹尾家も同苗と伝えられている。宣隆と岡本が懇意になるきっかけの一つが、賀茂の竹尾家の話題だったことは興味深い。

史料②・③ 明治元年（1868）9月、明治天皇が東幸の途次、東三河を「御通輦」されるにあたり、東三河の神職たちが供奉を志願したときの史料である。供奉は認められず、最寄りの路傍で拝礼いたすよう沙汰があった。

史料②には、路傍での拝礼を下知されたものの、一同の「名前書」を差上げ拝礼したいと再願したことが記されている。そして、これが認められるかはわからないが、志のある者は、御通輦の当日、麻袴着用にて小坂井鳥居前まで出張なさるべしとある⁽⁶⁾。

史料③は、三河県からの沙汰（路傍での拝礼）を周知するための書状の案文である。八名郡の神職を列記し、幾人かの名前の上に○印を付す。○印の人物への通知は不要ではないだろうか「考へ玉へ」と記す。

史料②・③ともに差出人・宛所はないが、筆跡は草鹿砥宣隆のもので間違いない。そして内容から竹尾茂穀へ宛てたものと考えてよい。つまり八名郡の神職への通知を、茂穀が発する立場にあり、その内容や通知先の人選について宣隆に意見を求めたということだろう。両者の関係や役割を考える上で示唆的な史料である。

史料④ 慶応4年（明治元年）5月頃に書かれたもので、やはり署名はないが、草鹿砥宣隆の筆跡である。前半は明治新政府への社領安堵の願書で、後半は4月の神仏判然令に依じて書かれた吉田天王社の改称の伺い書⁽⁷⁾である。

前半の願書部分には、砥鹿神社の由緒、朱印状の受給状況、これまで一宮領の人別帳を吉田藩に提出してきたこと、草鹿砥家の五代延胤から宣隆まで代々官位を授かってきたことなどが書かれ、「社領之儀も是迄之通被下置候」と社領の安堵を願っている。これは「万石以下ノ領知并寺社共、凡テ地方御政務ノ儀ハ知行所最寄ノ府県ニテ支配可致」⁽⁸⁾という事態に対処するために書かれたものだと考えられる。実際に提出したかどうかは定かではない。

史料⑤ 時代は遡り、安政6年（1859）の史料である。竹尾茂穀⁽⁹⁾による御朱印改めおよび頂戴の日記である。

竹尾茂穀・草鹿砥宣隆・羽田野敬雄・辻村貢⁽¹⁰⁾・鈴木謙之助⁽¹¹⁾の5人で出府し、江戸でさらに八幡村八幡宮の寺部春之丞⁽¹²⁾と当古村天王社の大林の子息と合流し、合計7人で朱印改めに臨んだ⁽¹³⁾。

触が届いたのは、安政6年5月。9月から11月までの間に出府し、御朱印に写を添え、

松平右京亮・松平市正（対馬守）まで差出すようにという内容である。竹尾は草鹿砥等と「聞合」ながら、御朱印の写と手目録を準備した。東海道の宿場への人馬継立等を依頼する先触れは草鹿砥が出した。

出発は10月19日で、草鹿砥と竹尾はご朱印を両掛けの一方ずつにそれぞれ納めた。

初日、竹尾は川舟で船町まで下り、そこで草鹿砥と合流し、東海道を新居へ向かった。羽田野等は先に出発していた。この日、草鹿砥・竹尾は新居の油屋嘉兵衛宅に泊まった。油屋嘉兵衛とは高須葛根のことである。この史料によると、草鹿砥家の「縁家」（縁者）だという⁽¹⁴⁾。

この夜、江戸城本丸焼失の知らせが届き、新居本陣飯田武兵衛宅に泊まっていた羽田野らと相談の上、一旦引き返すことにした。

11月3日あらためて出発。高井村で草鹿砥と合流した。前は吉田宿経由であったが、今回は、田尻道（別所街道を森岡辺りで分れて南下して火打坂に到り東海道へ合流する道）を通り、二川へ出て、羽田野等と合流。新居から舞坂まで船で渡り、伊場村（東海道沿いの村、現浜松市）では賀茂大人霊社などを参詣し、見付宿では大久保忠尚のもとに立寄った。途中、改めを終えて帰る財賀寺の住職などと出合い、11日に江戸へ到着した。

12・13日に松平対馬守・松平右京亮の屋敷へ出向き、7人連名の手札と各々の御朱印の写などを提出した。その後、2・3人が代表して、改めの日程を伺いに幾度も出向いたが、なかなか日程は伝えられず、結局改めが行なわれたのは江戸に到着して1ヶ月後の12月9日だった。

改め当日の記録も詳細である。手順や作法などは当然であるが、竹尾自身はもちろん同行の6人の順番や、一緒に改めを受けた駿河富士大宮神主富士又八郎・山城稲荷神主・備中吉備津神主・西三河土呂松平甚助などの名前が書き上げられている。

また、八幡村八幡宮の寺部の御朱印に染みがあるという問題も起きたが、草鹿砥と羽田野の助言で断書を差出し事なきを得たことが書かれている。

なお、この日記には、在府中、賀茂村の武家領主である岡部藩主安部信宝に御目見えした時の記録もある。さらに3年後に新たな御朱印を頂戴した時のことも追記されている。

3. 史料翻刻

(史料①)

準様へ申入候、上賀茂岡本壱岐守と申人、皇学所講官ニ付、毎度出逢ひ申候故、彼ミアレ祭ノ事承り候所、当時祭りハ有之候得共、旗ラシキ物杯ハ不用、彼式ナルミアレノ料ノ帛ナド当時ハ形モ無之候よしにて候、御序之節 御社由緒書并御縁家之御姓名等被仰遣被下様、尊大人へ被仰上可被下候

新春之嘉祥千里同風日出度申納候、弥御揃御安泰被成御迎年奉賀候、随而下官家居無異致加齡候、乍憚御省念被下候

小生事帰国之期難計候間、兼而御約束之書物飛脚便へ差出し申候、尤京着以来 皇学所御用繁多之上、雨天勝にて外用難弁候故、書林へ申付ケ為相集候間、不行届之事有之候、永日手透ニ相成候ハ、買集メ可申候

春日益御勉励奉祈候、御詩作拝見致し度候品ニより四月上旬一旦帰国可致と存候へとも、公用之事故何共難計候、尚逗留中御用ノ向者御申越シ可被下候

女大学一冊コレハ御序之節、拙宅へ御届ケ可被下願上候

各様 御両親様始御一統へ宜敷御伝語可被下候、尚期再便候、頓首

正月十四日

崧

準 様

芳太郎様

(竹尾家文書No.97)

(史料②)

以廻状得御意候、然者今般 御通輦ニ付、同職一統供奉之儀従 三河県其筋へ被相伺候所、当日混雑ニ付不及其儀旨御沙汰有之候段者此間以廻状得御意候通りニ御座候、然ル所尚又一同名前書差上拝礼支度趣 三河県へ再応相願候所、御聞済之有無者難計候得共、精々相伺可申旨被申聞候間、御一同御名前相認メ今日 三河県へ差出シ申候、就而者願之趣御聞済之程者難計候得共、御志有之候向々者当日麻上下御持参、小坂井鳥居前迄御出張可被成候、尤名前書相納り候哉否之儀者一向相分り不申候間、左様御承知可被下候、右之段得御意度、如此御座候、以上

〈竹尾家文書No.6〉

(史料③)

尚々着服之義者麻上下ニ而可然様被申聞候

以廻状得御意候、然者先般小坂井ニおいて御談申候一条従 三河県其筋江被相伺候所、御通輦当日混雑ニ付供奉之儀者不及其儀、最寄路上ニ而拝礼可致旨御沙汰ニ御座候間、左様御承知可被下候、右之段得御意度、如此御座候、以上

○吉川村 坂上山城

一鉄田村 佐藤右近 平野村 中西播磨

○入文村 岩瀬作郎右衛門

○西川 小柳津傳六 ○馬越村 森九郎兵衛

先日帳ニナシ

同上

和田 久米筑前 長楽 佐藤越後

高山 中山日向 同 夏目石見

長彦 佐原常陸 神郷 (大木出雲

古田——

高井 加藤筑前 高井 近藤出雲

牛川 平尾三右衛門 同 平尾宮内

牛川 本多^{ヨシ}葭太郎 田中 松坂越後

仁連木 及部長門 ○岩崎 鈴木藤太夫

帳ニハナシサレトモ黒印地ナレバ廻ス方宜シカラ
ンカ

○ノ分ハ止メテモ宜シカランカ考ヘ玉ヘ

〈竹尾家文書No. 21-2〉

〔史料④〕

私奉仕神之儀、延喜神名式所載參河国官社二十六座之内宝飯郡砥鹿神社と被記候社ニ而当今二社有之、一社者同郡一宮村ニ鎮座、一社者従同所北二里ヲ去り本宮山上ニ鎮座、二社とも砥鹿神社と唱来候、右両社領之儀、一宮領高百石者一宮村ニ有之、本宮領高二十石者本宮山之麓長山村ニ有之、一宮領者慶長七年、本宮領者同八年、従東照宮任先規御寄附之趣御朱印被下置候、以来万延元年迄御代々御朱印二通宛私兼帶頂戴仕来候、右御朱印之儀先年者従幕府直様頂戴之所、貞享二年以来其村々之領主地頭へ御渡シニ相成候故、近來一宮領者一宮村領主大河内刑部大輔在所本国吉田城ニ而請取、本宮領者長山村地頭巨勢大隅守役場本郡形原村ニ而請取之、且私并支配之祢宜及社領之百姓共人別等者右刑部大輔役場へ差出来候、次ニ私家之儀吉田殿執 奏を以五代之祖延胤寛文六年正六位上蒙 勅許、高祖父延貞正徳三年従五位下民部少輔任叙、已来代々官位昇進仕、支配祢宜之儀者明和四年以来吉田殿許状受取候、然ル所今般万機御一新神祇官御再興ニ付、以後者御本官ニ附屬仕、官位を始諸事万端可願出旨被仰出候上者向來叙爵之節御執 奏之儀者不及申、祢宜共補任之次第等一々蒙御所置度奉存候、且社領之儀も是迄之通被下置候儀ニ候ハ、私家累を始、祢宜并神封之戸籍等迄御本官へ差上候様仕度候、何卒出格之思召を以願之通被仰付被下候ハ、難有仕合ニ奉存候、仍而此段以書付奉願上候、以上

參河国宝飯郡一宮村

砥鹿神社神主

年号月日

草鹿砥近江守

私奉仕神之儀、天保六未年吉田殿執 奏を以神階相願候節、正一位吉田天王社と蒙 勅許候、然ル所此度中古以来仏道ニ混シ候社号可相改旨被仰出候ニ付而者向後吉田神社と相唱申度候得共、位記ニ有之候社号之儀ニ付、勝手ニ相改候而者如何敷奉存候間、此段奉伺上候、以上

參河国渥美郡吉田

正一位吉田天王社神主

石田伊勢守

〈竹尾家文書No. 101〉

〔史料⑤〕

〔表紙〕

「 安政六年

御朱印御改ニ付參府并頂戴控

己未五月より

重穀代 〕

一五月十九日半原⁽¹⁵⁾ 足輕中村仙右衛門持參以廻状得御意候、然者寺社 御朱印御改ニ付御書付式通從江戸到來候ニ付致廻達候間、御披見御承知可被成候、此段為可得御意、如此御座候、以上

未五月十八日

中嶋 巖

猪野新右衛門

富賀寺 〔承知仕候〕

慈廣寺 〔同断〕

竹尾能登守殿 〔承知仕候〕

覚

一御朱印頂戴之寺社之輩、不依寺社領之多少境内計之雖為 御朱印於令所持者御朱印可被下之間、御料私領ニ在之寺社領之御朱印ニ写を差添、当未九月より十一月迄之内江戸江致持參、松平右京亮・松平市正所江相達候様可被触之候、以上
未五月

別紙ニ而

一御料私領ニ有之寺社領之 御朱印御改ニ付、当地江差出方之儀格別手重之向

茂有之宿駅難儀致し候趣も有之哉ニ相聞
 候付、余り手重ニ無之様可致旨、去ル寅
 年相触候趣も候処、矢張前々之振合ニ準
 し手重之向も有之哉ニ相聞候、尤 御朱
 印之事ニ候得者大切ニ可致者勿論ニ候得
 共、可成丈無益之廉者相省き手重ニ不相
 成様精々省略可致旨可被相触候

未五月

紙濃美之通左書請候出江所役日廿付二右一

差上申御請書之事

御朱印頂戴之寺社之輩、不依寺社領之多少境内計之雖為 御朱印於令所持者御朱印可被下之間、御領私領ニ在之寺社領之御朱印に写を差添、当未九月より十一月迄之内江戸江致持参、松平右京亮・松平市正所江相達候様可被触之候、以上右之通御触書を以被仰達候趣承知仕候、依之御請書差上申候、以上

賀茂大明神主

竹尾能登守^印

未五月

半原

御役所

右之通相認、会所江罷通、兩代官江面謁、

請書差出し相済、此前も御朱印御改之方計
 壺通之請書差出し候間、此度も其通ニ壺通
 之請書出し申候也

一六月廿日年番徳左衛門よりありき持参

以手紙得御意候、然者 御朱印御懸り
松平市正様御事、對馬守様与御転任被成
候段為御知、右之趣從江戸表申來り候間、
為御心得致御通達候、此段可被成候、以
上

卷封二面

六月廿日

猪野新右衛門

中島 巖

富賀寺

慈庸寺

竹尾能登守殿 承知仕候

一御朱印写大奉書壹通、包紙同紙

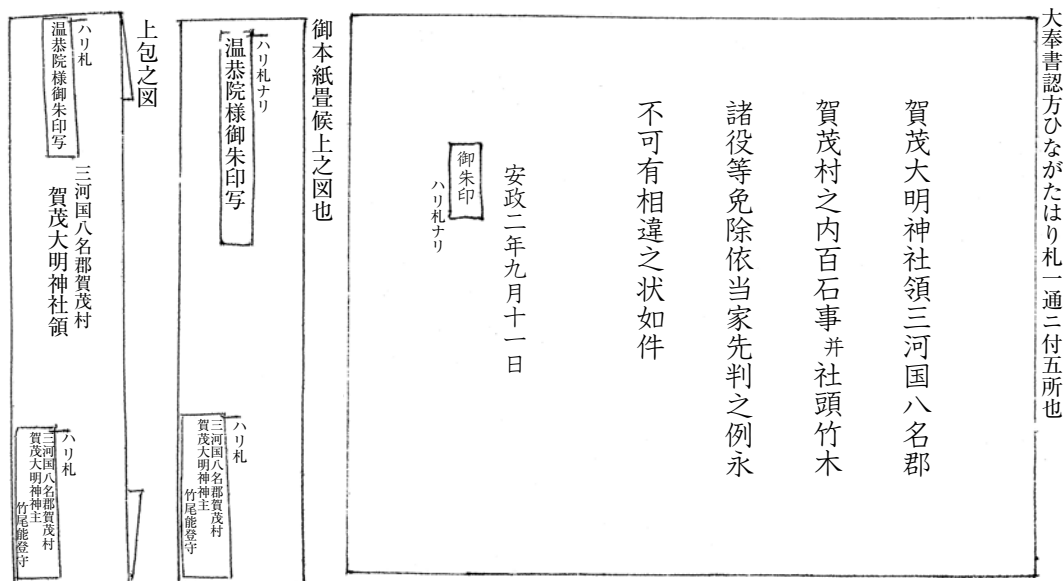
張札一通ニ付五枚也図之ことくいたし申候

面帳紙濃美大分候納江所奉行奉

是江者手目録相添申候、合三通也
本写へ者手目録なしニ而相添申候

領主江差出候も同様之帳面也、合而三通図
之ことく也

大奉書写十一通権現様お順ニいたしつみ候
而大奉書ニ而包候也



御奉行所江上ル美濃紙帳図

<p>并宮中竹木諸役令免</p> <p>許訖者神供祭礼無懈怠</p> <p>可勤仕之状如件</p> <p>御朱印</p> <p>慶長八年九月十一日</p>	<p>台徳院様御朱印写</p> <p>三州賀茂</p> <p>大明神領</p> <p>大明神領参河国八名郡賀茂</p> <p>村内百石事可全社納并</p> <p>社頭竹木諸役等免許之義</p>
---	--

表書図ハリカケニトジ候也

<p>御朱印写拾壹通</p> <p>三河国八名郡賀茂村</p> <p>賀茂大明神神主</p> <p>竹尾能登守</p>

右之袋図

<p>御朱印写拾壹通</p> <p>三河国八名郡賀茂村</p> <p>賀茂大明神神主</p> <p>竹尾能登守</p>

是者大美濃紙二枚ニ而造ル

奉書半切二認候ナリ

安部摂津守領分	高百石	権現様	宮中竹木諸役御免許	台徳院様	社頭竹木諸役御免許	大猷院様	右同断	嚴有院様	社頭竹木諸役御免除	常憲院様	右同断								右十一通之外	旅宿 日本橋増物丁
三河国八名郡賀茂村 賀茂大明神主		御朱印		御朱印															御朱印所持不仕候	尼屋市兵衛
竹尾能登守		慶長九年 九月十一日		元和三年 二月二日		寛永十三年 十一月九日		寛文五年 七月七日		貞享二年 六月十一日										

手目録

上包美濃紙ナリ

 安部摂津守領分
 三河国八名郡賀茂村
 賀茂大明神主

竹尾能登守

上書いたし申候

 三河国八名郡賀茂村
 賀茂大明神主
 竹尾能登守

 右之通一ノ宮・八はた・羽田など聞合候而
 したくいたし置申候

 一十月十五日、半原役所江届、台所ニ而安形
 忠蔵取次ニ而済申候、十九日発足いたし度
 段申述ル也

 一十八日、両祢宜共へも申達候、昼頃方夕方
 迄ニ兩人とも来り申候、何か御茶ニ而も差

 上申たく候へとも御取込ゆへ御帰国后と申
 候、此方何れ帰宅后目出度いたし呉候様申
 達申候

 一先日半原へ参り候節、猪野氏江見舞申候、
 拝領之カタヒラ染継之事し、らのし目着用
 之義も咄置度存候ニ付、中嶋氏へも立寄申
 候、菊池氏へも寄申候、同人者江戸引越ニ
 付いとまごいニ而候

 一八幡御朱印持参いたし呉候様頼ニ付、手前
 と一所ニいたし桐油ニ而包申候、是者子息
 春之丞殿江戸表ニ被居候ニ付、同人ニ勤さ
 せ度ニ付、御朱印持参頼レ申候、荷物之義
 者兼而一ノ宮草鹿砥氏と相談いたし置申候
 而、御朱印者手前・八はたとかた荷ニいた
 し、一ノ宮・当古・吉川とかた荷ニいたし、
 両懸へ入、吉田かわら町伊三郎と申人を頼
 持セ申候、駄荷者一ノ宮・手前・羽田・新
 銭町・大崎ニ而本馬壺たん有之申候、駕も
 新銭町のたれ駕持参申候、吉川・当古之御
 朱印一ノ宮頼レ申候、羽田者あら井飯田舎
 人⁽¹⁶⁾と申人之御朱印頼レ申候<sup>是者羽田
むこにて候</sup>

先触は一ノ宮方出し呉申候

 一十九日、暁七ツ半頃方支度いたし出立申候、
 渡船場迄参候頃夜明申候、近所之者見送り
 候、両祢宜も出申候かたきぬニ而候也、船
 税ニ百文遣し申候、吉田迄送下人ニ者弟正

久⁽¹⁷⁾・謙立・弟順作⁽¹⁸⁾・新三郎・金左衛門・
権兵衛・権六・新家下男菊次郎・内下男龍
藏

船町つばやニ而まち合せ申候、一ノ宮も被
参、荷物等一ツニいたし申候而両かけ申候、
吉田方三人者荒井迄先^{サキ}へ参られ申候、今度
同伴之人々一ノ宮草鹿砥近江守殿・羽田羽
田野常陸殿・新銭町鈴木美濃守殿・大崎辻
村貢殿、一ノ宮祢宜今泉主殿、供ニ召連候
人々甚之介・伊三郎・吉田方羽田國作・新
銭町勇作、上下拾人也、やりも八はた所持
之をかり候而惣もやいニ持申候

あら井あふらや嘉平ニ泊り申候、是者一ノ
宮縁家也、長州女中泊りニ付宿や不都合之
向ニ付世話ニ成申候

羽田・大崎者飯田武兵衛^{本陣也}是者羽田おひニ而候
ニ泊ル

新銭町者白井何某 鈴木縁家之由ニ泊り申候、
夜ニ入候而羽田・大さき見ヘル、是者江戸
表御本丸焼失之由噂ニ付相談也、其内ニ羽
田宅方書状来り申候、辻村淡路^{貢殿親也}方
之書状也、十七日申刻方焼初り候ニ付、酉
刻ニ江戸表を出候飛脚之由、吉田江戸屋方
吉田役所へ届之趣、柴田ニ而同人被聞候而
直ニ羽田へ被参人を出候也、然所参り候か
宜と申者モ有之、一先帰り候か宜と申もの
も有之、相談決し不申候、明日と申事ニい
たし皆々帰られ申候

廿日、飯田方江参相談申候、酒など色々馳
走ニ相成申候、亦あふらやへ帰り泊り申候
廿一日、夜明頃、一ノ宮友輔⁽¹⁹⁾殿・新銭町賢
之介殿・西がた廣岩主水殿被参申候、夜通し
来候由也、亥刻火鎮り候由、江戸屋ニ而咄御
座候也、一同あふらやへ打寄相談候処、先
者立帰り候方可然と申事ニ付帰り申候、夜
飯過帰宅申候也

右御焼失御延引者七日位も御座候而又御改
始り候哉ニ覚申候

廿四日、一ノ宮へ聞合ニ参候

廿八日、一ノ宮見へ申候、出立之日限定メ

候相談、来月三日可然と申事ニ而同人者直
ニ吉田へ被参、先触役所へ届、三人之衆へ
相談方になり、此方半原へ者荒井ニ居候由
ニ内々庄屋所より届もらひ申候、又朔日徳
左衛門ニ半原へ届ニ出もらひ申候、祢宜共
出候テモ宜敷候へとも内々之義ニ付、右之
通いたし申候

十一月三日出立、高井ニ而一ノ宮と一所ニ
成候引合、此所迄人々送り来、新家茂啓⁽²⁰⁾・
金左衛門・順作・権兵衛・八右衛門・久六・
下男也、田じり道を二川へ出ル、橋本屋ニ
吉田三人衆と出合申候、今度者鈴木者賢之
介被参候、荒井あふらやへ立より、船壳艘
買切ニいたし申候、舞坂捧屋ニ泊り申候
四日、雨少々降、濱松いば村岡部次郎右衛
門へ立寄、賀茂大人霊社へ参詣、賀茂新宮
社へも参詣いたし候、見附惣社八幡之神主
大久保へも立寄申候、雨しきりにふり難義
いたし、袋井若松屋ニ泊ル

五日、七ツ頃大井川越ス、嶋田兜屋泊り

六日、駿府浅間社へ参詣、大萬屋ニ泊ル

七日、雨天四ツ頃方天気、吉原宿扇や泊り

八日、雨天、三しまニ泊ル

九日、天気、昼支度箱根米やニ而いたし候、
小田原ニ泊ル西川や源兵衛

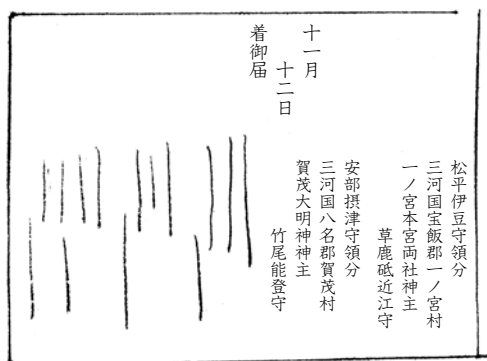
十日、天気、平塚ニ而春光院⁽²¹⁾ 帰りニ出
合申候、七日ニ御改請候由也、藤沢遊行寺
へ立寄、戸塚少し前ニ而財賀寺ニ合、九日
ニ御改受候由、戸塚中村治右衛門泊り

十一日、七ツ頃宿を出ル、夕七ツ頃檜物丁
伊勢屋安兵衛ニ付候処、差支居候ニ付、同
丁尼屋市兵衛方ニ泊ル、和田久米遠江⁽²²⁾
居申候

十二日朝、寺部春之丞見ヘル、肩衣着、昼
飯過すきや橋内右京様へ届ニ参ル、手札連
名いたし申候、図のこつくいたし候

右京様ニ而者今日者御改日ニ付明日出候よ
ふ門番申候、桜田御門外松平対馬守様へ出
申候、門ニ而手札出し申候、御玄関ニ而手
札相渡し候而先例之通すけ刀ニ而別席へ通

り控居申候、坂田武兵衛殿被出写し差出申候、奉書写・美の紙ともみな出シ申候、又四日ニ伺出候様被申候、夫方永田馬場⁽²³⁾へ出、向作之進殿ニ面会、写手目録差出候処、預り置候と被申候間、何分宜敷頼候由申帰ル、添使者者先達而富賀寺・慈廣寺も



済居候ニ付其節相済候由也、岡部之神職夫前ニ出候由也

一十三日、天気、右京様へ届ニ出ル、玄関ニ而済申候、夫方牛込松平源七殿見舞申候、主税殿・春之丞殿も留主也、源七殿ニ面会、夕方帰ル

一十四日、対馬様へ伺ニ出ル、一ノ宮草鹿砥・新銭町鈴木^{カヘ}・大崎辻村、惣名代也、奉書写し返ル

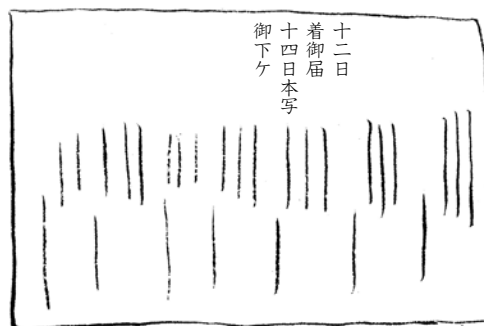
柴田能登守殿方八はたへの差紙昨日来り居候ニ付、牛込へ持セ遣ス^{是者いまた八はた添使者済不申候間、右添使者ニ出候由之差紙ナリ}

本郷元町伊勢屋弥七・同一丁目伊勢や音五郎へ見舞申候

一十五日、朝大名衆登城拜見ニ西之丸大手先へ行申候、夫より芝神明・増上寺目かけて見物いたし申候

一十六日、四ツ谷菊池氏見舞、辻村同道也、市ヶ谷・小石川の方へ出、夕方帰ル

一十九日、対馬様へ伺ニ草鹿砥・寺部出ル、廿六七日頃出候様達し也、門ニ而手札渡し玄関ニ而連名之手札渡し申候、玄関ニ而相済申候由



一廿一日、永田馬場屋敷参ル、綱嶋氏へ見舞申候、是者先日菊池氏へ借宅之義頼置申候ニ付、同人心安きゆへ世話いたしくれ候間、見舞申候也、右借宅山王社内ニ有へき由ニ候処、出来兼申候、橋本氏へも見舞申候、向氏へも立寄、御目見いつ頃被仰付可被下哉と伺申候、多分朔日頃ニ者可有之由被申候、御朱印御改も月切ニ者可済候とも存候間、月内之内ニ御取計御頼申たく候間、何分宜敷御頼申候と申候、同人被申候者左候ハ、月内ニ相成候様ニ咄合可申由被申候、御直書之義、此先御朱印頂戴之節間違之筋有之候間、咄申候処、夫者其節後例ニ者相成不申候様、半原よりも文通有之、此方ニ而も心得居候間、御心配無之様ニ被申候、其外神主社家之かどしかと立居候義など咄申候而、貞享年中御裁許状写・天明度済口証文写差出見セ置申候、是者写しに候間御返しニ者およひ申サズと申置候

一廿三日、永田馬場屋敷方書状来り申候

以手紙啓上候、然者明廿四日 御逢御座候間、朝正五時御詰可有之候、右之段可得御意如斯御座候、以上

卷封ニ而

十一月廿三日

安部摂津守内
向作之進
竹尾能登守様

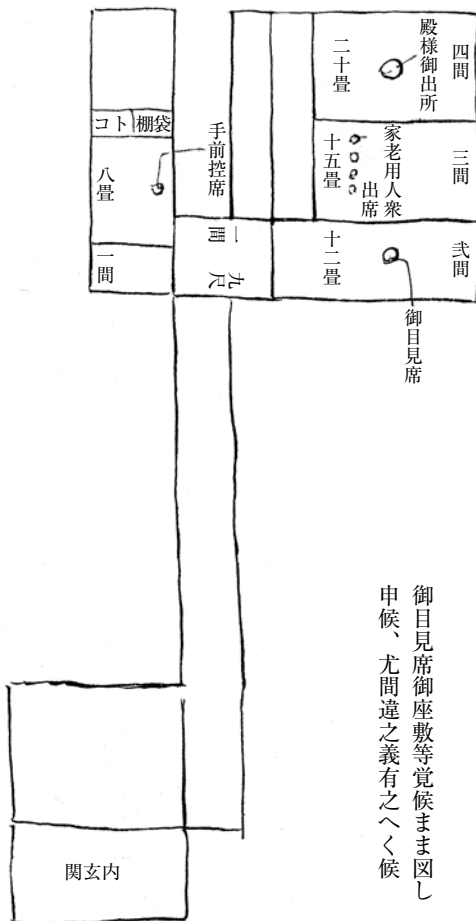
一廿四日、五ツ頃永田馬場へ若党甚之助・草

杉原半切二
利休饅頭一

春名金左衛門殿

是者先年遣し候義無之候得共、向氏礼ニ寄
候よふ差図ニ付、右之通いたし申候

玄関取次ニ而、今日御執成を以御目見之上
御料理頂戴難有奉存候、御礼として罷出候、
宜敷御頼申候段申置候なり、右案内いたし
呉候人江酒料貳百遣ス



一廿八日、辻村・鈴木奉行所へ伺ニ出ル、今
日祝礼ニ付、門方帰ル

一十二月二日、手前・羽田、奉行所江伺ニ出
ル、門ニ而手札出し玄関へ通り、例之通連
名手札出候処、六日ニ出候様達被申候、玄
関方帰ル

一五日、一ノ宮・鈴木伺ニ出ル、御改日ニ付
門方帰ル、手前水天宮へ参詣、次手ニ三田
二丁目松平主殿頭様下屋敷芦田善藏殿へ見
舞申候、是者吉田城内司縁家ニ而おはる殿
被居候所なり

一六日、一ノ宮・鈴木兩人伺ニ出ル、今日次
手ニ切紙渡り申候、九日御改

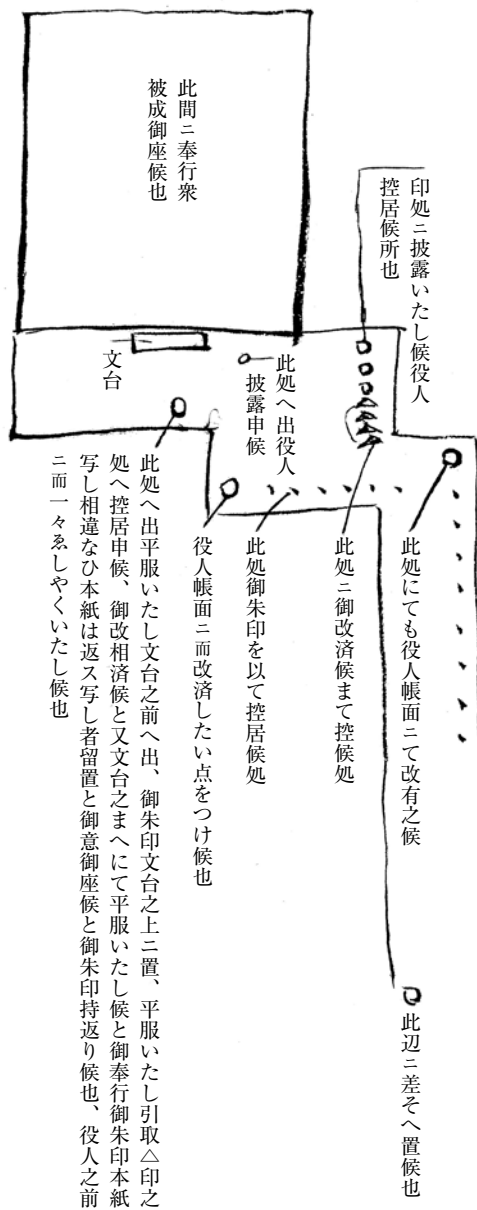
十二月九日四時
対馬守宅寄合
前日猶又可罷出候

一七日、御朱印御改日様之咄ニ牛込江参り候、
今日久米氏御朱印御改右京様ニ而相済

一八日、祝礼ニ付対馬様へ出ル、肩衣着用也、
草鹿砥・手前・八幡・大林・羽田塀・鈴木・
辻村供之者など者兼帯、門ニ而手札相渡し玄
関へ通り奉書写差出、夫方席へ通申候処、
十人程ツ、も順ニ呼出し、祝席を見セ御改
之節之手つゞき教へくれ申候、順ニ帰ル

一九日、五ツ時頃、対馬様江出申候、門開居
候、供に御朱印持セ御門方通申候、玄関ニ
而手札渡し、例席江通り控居申候、役人帳
面を以、一々呼立候而昼飯被下候、切めし
九ツ・にしめ五品程こんにやく・こほう
やきとふふなど也、
折箱ニ入、水引かけ有之、夫方書院へ集メ
申候、役人帳面を以呼候而順ニ御改之席之
かたへつめ候、又帳面ニ而たゝし申候、ハ
ツ半頃御改相済申候

御朱印者箱之ふたへ入、温恭院様御朱印を
上にいたし、夫より権現様と順ニつミ候而
持出ルナリ、六つ時之切紙之もの昼前ニ済
候趣也、尤是者僧之方多キ様覚申候、昼後
も僧余程有之候、右順者僧共相済社家也、
手前ともハ右中程之様存候、先辻村相済、



三四人もへだゝり草鹿砥・八幡外三人程済而手前・鈴木、又五人とあゐ有之羽田野、又六人も置候而大林相済申候、今日出席候外社家衆之覚候者駿河富士大宮神主富士又八郎・山城稻荷神主松本某目代羽倉某差添出申候・備中吉備津神主甲斐兼武神職共余程出申候、西三河土呂松平甚助も出申候、相済候と例席へ下り、御朱印を箱へ入、引

取下也、手前者次手ニ永田馬場へより候間、春之丞殿ニ御朱印者頼置、先へ引取玄関へ出、御改無滞相済難有仕合奉存候と申出かけ候と、役人中手札出し候よふ被申候間、手前申候者先例御門迄出立歸り之婦国御届申上候よふ申候処、手札被出候へ者其向ニ取計由被申候間、手札出し歸り申候

御朱印持参不申候間、くゝりゝ引取、門ニ而三州竹尾能登守御玄関へ罷出候と申夫方永田馬場玄関へ出手札、口上御朱印御改今日無滞相済申候支度出来次第十一日ニ出立いたし度候間御届申候と申引取、家老・用人・向氏右右届暇乞ニ出玄関ニ申置歸ル、向氏へ者鳥渡立寄申候、橋本江も寄申候、菊池氏江者伊原軍次と申人ニ伝言いたし置申而歸ル、右京様江御礼婦国届者草鹿砥連名ニ手札認候而同人を頼宅人ニ而勤被申候処無滞相済

一十日ニ者処々江暇乞ニ出ル、春之丞殿・鳴之介も来り申候、同人者此節江戸ニ居申候、当七月国元を出、所々廻り候而、此節江戸へ出候也夜ニ成、荷物取しなへ申候

此度者大崎者五郎殿家来と申ニ而同家方先触先日出しもらひ申候、此節年頭之御礼ニ参府被致居候間、都合よろしく歸り供ニ申ニいたし候、屋敷者板倉様同屋敷之由、何事も辻村氏取計申候

一八幡 温恭院様御朱印ニしミ有之、是者此度おもニ御改ニ相成候御朱印ニ付心配申候、一ノ宮・羽田へ相談候処、断書添而出候かた然べきと申事ニ付、左之通認差出申候

口上之覚

温恭院様 御朱印ニ如何仕候哉しミ相頭レ候、御改無滞相済候様被仰付被下度奉願候、以上

三州宝飯郡八幡村
八幡宮神主

未十一月

寺部阿波守印

松平右京亮様
御役人中

対馬様江も如斯いたし、右両通とも美濃紙

写ニ添出申候而対馬様役人取次飯田武兵衛殿ニ相渡し申候

一御朱印御懸り御改被遊候御詰合衆之御名前

松平右京亮様 上州高崎八万二千石
すきや橋内

松平対馬守様 豊後杵築二万二千石
外桜田

御儒役五百石 林図書介
西之丸留守兼

大学頭 林民部
嫡子

奥御祐筆 湯浅伴右衛門
組頭百五十石

御祐筆 大橋久兵衛・佐久間三郎兵衛・
川井亀太郎

一十一日、九ツ頃尼や出立、川崎遠州屋泊り

十二日、神奈川方船ニ乗横浜見物、程ヶ谷へ出、藤沢にとまり津たや

十三日、小田原西川や泊り

十四日、沼津元問や泊り

十五日、興津大黒や差合ニ付身延屋泊り

十六日、島田兜や泊り

十七日、大井川壺枚札七拾式文川壺人ニ付式枚取、見附大江戸や泊り

十八日、あら井江之船二艘買切ニ致し申候、本馬壺駄・からしり壺駄・分持壺荷・駕壺挺・

鑓一筋、草鹿砥・祢宜今泉主殿との、羽田野ニ国作・外ニ一人^{是者羽田つれ帰り、鈴候村之者也}

木、辻村、手前・甚之助、忠二^{是者坂井忠蔵倅ニ而江戸ニ居候間頼レ連帰り候也、一ノ宮とも外ニ一人一ノ}
やいニ御朱印之分持持セ申候

宮之者連帰ル、和田久米氏都合十三人也、風荒ク難義いたし候、関所断草ヶ鹿^(紙)・羽田・鈴木・辻村出申候、夫より飯田武兵衛へ鳥渡立寄、油屋嘉兵衛へも立寄申候而白須賀岡田や泊り

十九日、二川迄迎之物出居、萬屋ニ而休、酒なと呑候而、夫方大岩方吉田方之人ニ別れ、田尻道を返ル、和田ニ而一ノ宮・久米氏ニも別、入文方直ニ御宮へ参詣いたし目

出度帰り申候、会郷之者共二川或者田尻・和田辺迄出くれ申候、両祢宜も出申候、大岩山道ニ而出合申候、会郷之者へ祝ニ酒吞せ申候、是迄其儀者無之候処、少し事ニ而其方か宜敷可有申者有之ニ付、酒七升程も入申候、定重・茂兵衛・弥右衛門なども出申候

一廿二日、半原江着届ニ罷出申候、台所ニ而忠蔵取次申候処、十二月ニ相成候へ者役所者張不申候由ニ付、猪野宅へ出面会申候、御朱印御改無滞相済申候其上御目見被仰付御料理被下難有奉存候御次手之節宜敷御頼申候十九日着仕候間御届申候と申、書状差出申候、申上へき由被申候、次手ニ土産物も差出申候、菊池氏方あつらへ物も有之差出申候、中嶋・高橋・尾崎江も見舞申候、何れも菊池方之届物御座候、歳末之祝義いづも使差出候処、右次手ニ付両家へ出し申候

江戸表江之書状、天保度之節控ニ有之候間略ス

一 二匁 半切二帖 紙布たはこ入 壺匁二分 猪野氏
書袋三 三分 きせるつ、共

一 同断 中嶋氏

一 半切一 壺匁 高橋氏
書袋三 三分

一 同断 尾崎氏

手代安形忠蔵・同彦十郎へたはこ入七分五厘・草双紙二分、山方衆足輕衆江扇子袋入式本ツ、遣し申候、宿へにしきゑ五まい遣ス

文久二年壬戌二月十五日慈廣寺^ノ到来

廻状

去ル九日於江戸表 御朱印相渡り候ニ付、守護秦總左衛門・差添人水原関右衛門、翌十日出立、当方江罷越候積申来候、尤道中無滞候ハ、明十六日可致着与存候、左候ハ、翌日相渡可申候間、兼而左様御承知御他行等御延引可被成候、尤兩人着候ハ、早速御案内可申進候、右為御心得如斯御座候、以上

戌二月十五日

中嶋 巖

猪野新右衛門

富賀寺 承知仕候

慈廣寺

竹尾能登守殿 承知仕候^ハリ札

右廻状年番庄屋源右衛門江頼、返却いたし貰候

一十六日ニ夫々用意いたし居申候、一ノ宮ニ而かんばん・供傘・帶・供合羽・若党大小等かり申候、吉田司ニ而傘袋之ひも・杖・小袴・合羽等かり申候

同日七ツ頃半原^ノ使来ル

以手紙申達候、然者今十六日 御朱印到着候ニ付、明十七日相渡候間、朝五ツ時罷出頂戴可有之候、以上

二月十六日

中嶋 巖

猪野新右衛門

竹尾能登守殿

※

※

「両祢宜被出候手紙為心得誌置申候
以手紙致啓上候、然者今度寺社
御朱印相渡り候ニ付、秦總左衛門
水原関右衛門差添今十六日着、明
十七日竹尾能登へ相渡し候間、先
格之通貴様方ニも右為御礼御出可
被成候、以上

二月十六日

中嶋 巖

猪野新右衛門

加藤長門殿

中野 肇殿

」

右返書

貴札拝見仕候、然者明日十七日朝五ツ時御朱印御渡可被下旨被 仰達承知仕候、右貴答申上度如斯御座候、以上

二月十六日

竹尾能登守

猪野新右衛門様

中嶋 巖様

右半紙江包上書いたし申候、別紙ニ祢宜共へ来り候書状之書付出申候、下社家共へ之御達書早速^{相達}御届^ス可申候、以上

一江戸表へ差出候書状、中奉書

一筆啓上仕候、向暑之節就○御代替先規之通 御朱印被下置、今般頂戴○被 仰付冥加至極難有仕合○奉存候、右御礼為可申上○呈愚札候、恐惶謹言

二月十七日

竹尾能登守

書判

朝 只之進様

豊 善左衛門様

御郡代向作之進殿へ之書状左之通、杉原紙一筆啓上仕候、御代替先規之通 御朱印被下置、今般頂戴被仰付、冥加至極難有仕合奉存候、右為御礼如斯御座候、恐惶謹言

二月十七日

竹尾——二

向 作之進様

右式通者立歸御礼ニ罷出候節、会所ニ而御代官江差出申候

一守護役人兩所江之音物^{小杉五束杉原ニ包、金赤水引ニ而結申候、三本入}
扇子白やきニ入、式品共打のし添大観蓋^ニのせ申候 兩人共同様

富賀寺・慈光寺者右小杉扇子へ納豆壺箱ツ、添申候

一十七日夜八ツ頃^ノ支度いたし候所様々夜明方ニ出掛申候、供人左之通

同 頼吉	御朱印 簍差	先 払 瀬一郎
同 林作	清八 惣兵衛 李右衛門	侍 利助
	押 平吉	
	長刀 栄作	
同 五太夫	乗物 傳七 金六 三十 半十	侍 権作
立 傘 熊助		草履 又七
箱 国藏	合羽籠 長蔵 両懸 新家下男	鍮 久六

右弁当者わりご江つめ申候、外ニも持セ申候

一半原宿新六江立寄^{是迄者手前羽織袴ナリ}弁当つかひ支度いたし居候内ニ富賀寺・慈廣寺通候ニ付、麻上下のしめ着用いたし出懸申候、御朱印差添侍兩人者麻上下、若党兩人者羽織袴也、門外ニ而駕おをり、門内へ者御朱印

簍・台持共三人差添、侍三人・若党兩人・草履・箱ヲ入レ申候、右之外ハ門外ニ控居申候、簍者長屋向左手代官宅之へいぎハニ置申候、台所例席江通り申候、手代安形忠蔵江面会、昨日御朱印御着ニ付今日御渡被下候旨何分宜御頼申候段申候、兩寺も同席ニ控居候、五ツ過候頃、守護兩人・代官衆出席ニ而富賀寺・慈廣寺頂戴相済申候而手前出ル、御朱印内箱を服紗ニ包候ま、利助ニ持セ、侍式人・草履取連申候、出懸候と、竹尾能登守通しますと呼申候、玄関前ニて侍ニ刀を持セ、玄関ニ而御朱印箱を受取申候、玄関ノ間ニ手代詰居申候間、鳥渡目礼いたし例席へ出、代官中ノ西ノ方ニ被詰候間無言ニ而右へ目礼いたし、上ノ間西の方ニ兩人着座いたし被居候間、少しすゝみ候而右へ目礼いたし居申候と、秦惣左衛門殿被申渡候ハ、今般御朱印相渡申候間謹而頂戴可有之と被申候、水原関右衛門殿被申候者右御礼として江戸表へ出府ニ不及候様拙者共方申達候様ニとの御沙汰ニ候と被申渡候、夫より床前へ進ミ、平服いたし候而御朱印を戴、元之席へ帰り服紗を敷候而其上ニ而とくと拝見いたし候而箱へ納、右服紗ニ包、目礼いたし引取、手代中江者目礼なし、玄関ニ而利助へ渡し、先へ立セ引取、簍へ納させ申候、台所例席へ帰り控居申候而手代江申入候者、先例之通立帰之御礼申上度候間宜敷御頼申候段述候、役所へ伺候而立帰り手代被申候御順ニ御通被給候よふ被申候ニ付、富賀・慈廣相済、手前罷出例席ニ而代官中へ口上御朱印首尾能頂戴仕難有仕合奉存候御序之節宜御頼申上候与申、書状差出ス、申上而御さりますと被申候間引取申候、此度者帰りも手代江も目礼、例之通、又々台所へ控居候と手代被出候間、秦氏・水原氏御兩所へ御目ニ懸り度候間御案内被下度段申述候与足輕案内ニ而富賀・慈廣兩寺済、手前罷出申、音物も案内人ニ取次もらひ申候而玄関へ出、始メ而

之挨拶いたし、今般御朱印御守護御苦勞ニ奉存候首尾能頂戴仕大慶ニ奉存候右御礼申上候と申述、丁寧ニ挨拶有之、音物之礼も有之申候、夫方又々台所へ寄、手代中へ挨拶いたし、両寺と一同ニ下り申候、門外より駕籠ニのり直ニ帰り申候

御神前へ御朱印相納申候而神供献候、月並之神供も準ニ為献申候、右相済 御朱印を簍へ納、帰宅いたし申候、打祝ニ手習子供など呼申候、平皿汁也

同夜、会郷・其外弥右衛門・弥太夫・茂太夫・茂兵衛などへ神酒振廻申候、是者迎ニ出呉申候間、如斯取計候也

兼而御朱印を簍之ま、居間ニ直シ神酒を献置、右神酒お一献廻し、夫よりかん酒二献なり、ねごろわん親と中がさなり、口取者吸物^{さかな}_{後ことぶふ} 二つ・からいり・煮しめ・いり菜也、重箱ニ入出申候

一酒も十六日之夕方壺本取申候、是者供之手はづ等いたし候間、其節も吞セ、朝出懸ニも吞セ申候

一二本杉へ立札も今朝、久八・権左衛門を頼為立申候

一廿八日朝、両祢宜共出ル 御朱印御頂戴首尾能御済被成目出度存候段申候、羽織袴ニ而出申候、此方申候ハ夕方ニ神酒振廻候間出候よふ申候、羽織袴ニ而夕方出ル、吸物・三ツ井・大平出し候而沢山吞セ申候、跡ニ菜飯・平・ひたしニ而振廻申候、入用払木之義者先達而かれ木少々払候節申渡候、今度も 御朱印入用多分ニ掛り候間、少々差加ニいたし度候払木可致存候、しかし御山もあれ候義ニ付少々ツ、も払候而追々ニ差加候よふこと存候間、心得ニ申達候段申渡し置申候

一開門之義、寛政度者其義なく候趣ニ付、天保之度富賀寺を以相頼、山本氏取計開門ニ相成候、安政之度者正月松之内ニ付元方開門有之候、此度も其義なく候ハ、其節頼可申と存候■参り候節くゞり方入候へとも

御朱印受取候頃、門開候而夫方下り申候、此後者願不申候而も右例ニ相成候間、認置申候

一同廿四日半原代官兩人其外江為礼参ル、台所ニ而取次もらひ、両家出申候、外者台所ニ而差出取次もらひ申候

(杉原半切五帖 猪野氏江
菓子折式匁位

(同断 中島氏江
同断

杉原半切式帖ツ、
役所見舞
高橋鍬五良殿
同断
尾崎八十良殿

地半切式百枚ツ、
手代
安形忠蔵
安形彦十良

酒式升 山方作事方中江

同断 足輕中江

右之通いたし差出申候、宿新六江も半紙三帖遣し申候

一七月二日、一七日之雨乞有之、右満願之神酒今日出し候、暑中見舞も兼、手前風邪不罷出、肇も足痛、長門計出ル、御朱印頂戴之節之御直報あつらへ来ル

今度被成下 御朱印頂戴之難有之旨、依之家来方迄飛札之趣承之一段之事候、恐々謹言

安部摂津守
六月朔日 信宝（花押）
竹尾能登守殿

〈竹尾家文書No.132〉

4. おわりに

史料①～③では、維新期の草鹿砥宣隆の交友関係——門人（竹尾準・林芳太郎）・郷里の神職仲間（竹尾茂穀）・皇学所の同僚（岡本経春）——の一端が垣間見られ、史料④では、明治維新の大きな変革に宣隆が対処しようとする様子をうかがうことができた。

史料⑤は、竹尾茂穀による安政6年の御朱印改めの出府日記で、羽田野敬雄もこの時の記録を残している⁽²⁴⁾。両者は相互に補完しあう関係にあり、研究の素材として好史料である。

竹尾家文書は全195点を数え、まだ取り上げるべき史料がある。今後も順次紹介していきたい。

註

- (1) 那賀山乙巳文（1935）『賀茂縣主竹尾家と其一族』東三文化研究会
- (2) 田崎哲郎（2012）「賀茂神社竹尾氏を巡る書簡」『愛大史学 21号』や豊橋市（1978）『豊橋市史第七巻』。
- (3) 竹尾茂穀の長男。延久。嘉永4年（1851）～昭和6年（1931）。
- (4) 賀茂村の庄屋林徳左衛門の長男。のちの海軍軍医総監戸塚環海。昭和7年（1932）没。
- (5) 文政2年（1819）～明治13年（1880）。明治2年（1869）3月末に刊行された宣隆の著作『祭典略 祭文例附』の閲者。
- (6) 史料②で「小坂井鳥居前迄御出張可被成」とあるが、その後御油宿の欠間（東海道と本坂街道との追分）に変更された（竹尾家文書№21-1、21-3）。
- (7) 吉田天王社神主の石田家と草鹿砥家は縁家である。宣隆の叔父（宣輝の弟）が、石田正保の養子となり正満と名乗った。
- (8) 『太政類典』第一編第六三卷（国立公文書館デジタルアーカイブ）。
- (9) 竹尾茂樹の長男。天保元年（1830）～明治16年（1883）。慶応2年（1866）、平田門に入る。
- (10) 渥美郡大崎村八幡社神主。国学者辻村正朋の息子。
- (11) 鈴木重教。天保7年（1836）～明治元年（1868）。鈴木梁満の曾孫。吉田魚町熊野社神主。
- (12) 寺部親光。天保14年（1843）～明治31年（1898）。八幡村八幡宮神主寺部宣光の息子。
- (13) 人選は単にその時の都合や交友関係が反映されているようである。同伴することで数度に亘る奉行所への伺いなどを分担したり、問題がおきたときに相談できるなど種々メリットがある。
- (14) 田崎哲郎氏が史料紹介している羽田野の記録（註24文献）にもこのことは記されているが、「鈴木・勇作兩人者正田惣七方、一宮・賀茂上下五人者高須嘉兵衛方へ止宿、尤何れも親類なれば也」（読点は筆者が付した）と書かれており、誰の親戚なのか不明瞭であった。
- (15) 岡部藩半原陣屋。
- (16) 遠江国新居諏訪社神主。
- (17) 竹尾茂穀の弟。天保5年（1834）～明治37年（1904）。草鹿砥宣隆の門人。
- (18) 竹尾茂樹の三男。草鹿砥宣隆の門人。元治元年（1864）。
- (19) 草鹿砥友輔。天保5年（1834）～明治20年（1887）。草鹿砥宣隆の弟。日下部真辻・尾崎舍人などと称す。
- (20) 賀茂神社神主竹尾家の別家の竹尾彦九郎家7代。明治40年（1907）没。
- (21) 石津山春興院。八名郡和田村に所在。
- (22) 八名郡和田村八幡宮（根本八幡社）の神主。
- (23) 岡部藩江戸上屋敷。
- (24) 田崎哲郎（2009）「安政六年朱印改め 附天保十一年朱印状請取」『愛知大学総合郷土研究所紀要 第54輯』

